

平成 30 年度第 2 回古賀市スポーツ推進審議会【子ども部会】 会議録
(要約筆記)

(座長)

- ・配布資料に基づいて、事務局より議事の進め方、内容について説明を願う。

(事務局)

- ・1 回目の部会では、「現状の課題や方向性についての意見や思い」を付箋に書き出す。2 回目の部会では、1 回目の振り返りと確認共有、10 年後の姿について協議をする。3 回目の部会では、子ども部会としての方向性をとりまとめる。

(座長)

- ・まず各自付箋へ記入いただき、その後意見として貼り出しながら発言をお願いする。

(委員)

- ・青柳小で独自に行っている立腰「こしばねタイム」のような、古賀市独自の「古賀市の体操」みたいな、全員でやる運動(家トレのような)をやってみたらいいのではないかな。
- ・部活が競技スポーツだけになっていると思うので、競技ではなく楽しむスポーツという、中学生でも同好会のようなものを立ち上げてみたら、部活に入らない女子なども関心を持って良いのではないかな。

(委員)

- ・幼児期や小学校低学年など、プレゴールデンエイジ期と言われる子ども達に、コーディネーション運動、特にリズム感は大事で、それを高めながら基本的な動きの習得に繋がっていくプログラムがあった方がいいと思う。
- ・物を投げることは運動能力なので、その動きを習得し高めるものがあつたらいいと思う。
- ・部活動は、指導者の意識改革が重要である。県でも運動部活動指導のガイドラインができたので、それを基にした、外部指導者も含めた徹底的な意識改革が必要と思う。

(委員)

- ・部活動に関しては、メディアでもブラック部活などと言われて、先生たちが指導するのなかなか難しくなっている。
- ・今は中学の部活動でも週 2 回の休みがある、でも部活動を推進している。
- ・子どもは部活動に行っているけれど、そこに先生がいなくてという状況であれば、やはり外部講師なりきちんと見てくれる人の配置は必要であると思う。推進する以上は、安心して安全に活動できる環境の整備がいる。
- ・幼児期では、3 歳児は遊び込みが少ない状態で入園してくる。皆で楽しく遊べる場があるとよいと感じている。
- ・親子で遊ぶ機会も少なくなっている。もう少し大きくなったら、自分たちで遊びに行き遊ぶという環境も整えてあげたい。

(事務局)

- ・こがっ子元気アップチャレンジは、平成 30 年度で終了予定だが、今後地域主体への活動へ展開できるように進めることが課題と考える。
- ・ジュニアスポーツ団体の支援として、指導者の育成が必要と考える。体罰によらない、危機管理や安全面に配慮した、また子どもの発達段階に応じた指導など研修できるようにしたい。

(座長)

- ・まずは歩いて登校することがベースである。学校に赴任してきて、多くの親が車で校門まで送迎しているのに驚いた。
- ・小学生は歩くことを継続すれば、体力テストでも 4 年生から結果は向上してくる。スポーツをするにしても、基本はそういうところにあると思う。
- ・元気アップチャレンジでも親は子どもを預けっぱなしだが、親も一緒に遊んで楽しさを知るといことも大切と思う。
- ・地域の公民館を開放して、放課後には子どもが集まる場とか、あるいは日中は子育て中の親子が来る子育てサロンのような場所になれば、次のステップとしてスポーツなどの企画にも繋がってくるのではないかな。

(委員)

- ・スポーツの企画という点では、市独自でスポーツを推進する日などを設定して、校区単位でもよいので皆で声をかけ合って集まり、いっせいにスポーツをするような企画もよいのではないかな。
- ・以前経験したのは、地区での 3 世代運動会で、人間関係とか親子関係が良くなるといういい経験をした。昔ながらの運動会など、少し振り返りながら取り組めるものがあると思う。

(委員)

- ・例えばスポーツ月間という中でやっていくのもよいと思う。その日だけの実施だと、その日来れない人はもうできないということになってしまう。
- ・古賀市はイベントが多すぎて、毎週イベントという時もあるという声も聞く。月間という大きなくくりで啓発するという手もある。
- ・例えば駅伝は中学生以上が参加対象で、地域によっては駅伝でまちづくりに繋がっているところもある。しかし街部では参加しないところも多く、イベントの周知も行き渡っていない現状もある。
- ・元気アップチャレンジの指導をした経験から、子どもは年齢によっては運動遊びにならない、ルールを説明しても理解しない、と難しいところも感じた。体験不足、遊び不足、ルールを守れない現状がある。これは解決できるのだろうか。

(座長)

- ・全体会でも話していたが、子どもも幼児、小学生、中学生と年齢層に応じて遊びや運動のスタイルも全く違う。年齢層に応じた準備は必要と思う。

(委員)

- ・イベントや大会をしても、運動能力の高い子どもは参加するが低い子どもは参加しない、そういう視点をしっかり捉えておかないと、大会の企画を練っても能力の低い子どもは何も変わらない。
- ・運動の得意な子どもしか集まらない。やっても同じになるなら、中身を変えていかなければならない。
- ・成人の無関心の件についても、時間がないからやらないとかではなく、はまればきっとやるはず。スポーツ運動で何かやろうという発想が、もはや無理なのではないか。
- ・家トレなど生活運動の中でとか、仕事の中で、健康にもいいというアプローチでやらないと、これ以上スポーツを企画して環境整備しても集まらず無理があるのではないか。
- ・「歩く」というのは最低限の話で、本当はどう歩いてくるかというのに取り組まなければならないと感じている。どう股関節を鍛えて歩いてくるかが大切である。

(座長)

- ・元気アップチャレンジも、行政と学校と家庭とがうまく連携してやってほしい。関連を探っていけば、実態に合ったものに展開できると思う。
- ・家庭から要望があったものを取り入れるとか。また学校は家庭に、「体力向上のためにこんな取り組みをしています」と伝えていかなければならない。それぞれが行うのではなく、3者が共有し連携していくことが大切である。
- ・幼保連携にしても、小中連携にしても、そこが切れているのかもしれない。
- ・元気アップチャレンジにしても、親は預けたら終わりの現状である。子どもがそこで学んだことを、家に持って帰ってやっているかといったら、そうではないのではないか。
- ・遊びでも、そこで学んだものを家に持って帰って繋がりをもっていければよい。

(委員)

- ・運動する機会を増やすためにはどうしたらいいかと考えるときに運動をする子どもは、ほっといても自分で何でもするが、していない子や苦手な子がどうやったら意欲的に取り組めるようになるかということを考えないと、なかなかスポーツをしようとはならない。
- ・幼稚園で、職員向けに「美容と健康」という企画をしようと職員にアンケートを取ったが、やはり15%くらいの人はいなくてもいいという考えがあった。そのうちマッサージくらいならしてもいいかなという人は僅かにいたが、来ない人は来ない。
- ・そういう人々を参加させようと思ったら、もっと魅力的なものを企画しなければならぬ。得意不得意もあるので、皆をどんどん拾っていくにはどうしたらいいか、というのは大人も子どもも同じく課題になる。

(座長)

- ・青小キャラバンでは、6年生の行事で否定する子どもはいない。歩けるかという不安はあるが歩きたくないとは言わない。6年生の本番に向けて、4年生から登山、キャンプと準備していったり取り組んでいる。そういう入り方、スタートの仕方というのが効いているのだと思う。

(委員)

- ・乳幼児期は素直に拒否反応を示したりするが、大きくなると我慢をしたり、自覚する気持ちが生まれる。

(委員)

- ・アンケートで子育て中のお母さんたちは、託児所があればよい等の意見もあるようだが、仮に託児所があっても来ないのでは、とも思う。
- ・子どもを預けてまでスポーツをするという事に罪悪感があるのではないか。子ども達に運動教室を実施して、その横で

母親もストレッチとかをやるなど、形を変えてやってみたらどうかと思う。

(座長)

・幼児期から小学校低学年くらいまでは、親子で一緒にやるというのがベースではないか。それで面白さを知った子ども達が、ジュニアスポーツに行ったり、部活動で頑張ったりすることに繋がっていくのではないか。

(委員)

・ボール投げができない子どももいるし、ボールを取れない子もいる。

(座長)

・学校で休み時間にやっているのはドッジボール、鬼ごっこ、縄跳び、低学年は一輪車に興味をもった子は乗ったりしている。ボール遊びは野球よりもサッカーが多い。

(委員)

・幼児期で、どうやったらボール投げの能力が上がるかというのを講習してきた。指導する職員の難しさもある。

(委員)

・ボール投げは自分も教えられた記憶もないし、子どもにどう教えるのかについては興味がある。

(委員)

・遊びの中でキャッチボールが始まって、それがゲームになっていく。指導となると難しい。

(座長)

・以上で、本日の部会は終了する。ご協力有り難うございました。